

# アンティークショップで「写し」を想う

高橋篤子

有田焼と言えば、手描きの高価な本物もあれば、安いまがい物もあります。よく見なければ「優れた器」にも見えます。

「これは本物だろうか」と躊躇してしまいます。

買うとなると「ちょっと待った」が入ります。実際のところは、買い手の判断しだいと言う事です。

アンティーク物は実際に使うよりも、鑑賞物として飾って楽しむことの方が多いのではないのでしょうか。

まがい物とは、ブランド物を真似た偽物だと思います。

「写し物」は実際に使ってみると使いやすいし、「写し物」がプリント物なら、プリント物を「手書き」と称して高価な価格で売ることが、一番おそれていることです。

「写し物」があったからこそ「伝統」の質をおとすのではなく、むしろ手描きの良さを繋ぎとめる方に働いたのだと思います。

プリントの技術によって「写し物」は本物よりもたくさん市場に並べられて、安く購入できると言うメリットが一般的になってきました。

有田焼の中でも美しいとされている伊万里焼は、ヨーロッパでも上流階層に気に入られ「マイセン窯」は最も有名な窯です。日本の柿右衛門がその発端だと知られています。

海外の絵付師が腕を競い合って「写し」をした事実は今もなお文献として残っています。

街なかのメイン通りを外して一歩裏手の路地を歩いて行くと、「地味な看板」が目にとまりました。回りは飲食店ばかりの中に、ポツンとひとつだけ異質なオーラを放っているお店でした。

これは是非、中を覗いて見る必要があると思います、中に入る事にしました。

階段を上がると、まず眼に飛び込んで来たものは、手作りの籠や煌びやかなガラスの行列です。奥のコーナーに陳列されているのは、鑑賞物の作家さんの作品ばかりでした。

私は有田焼が好きです。本物は手描きで一品物ばかりでした。

値打ち物だけど割れてしまうと価値が無くなります。

真剣な目で本物を見ながら、時間の経つのも忘れるくらいお店の中を歩き回りました。

器が割れるのは心が痛いです。欠けた器が「金継ぎ」をして復元されるのなら話は別です。「こんな時にご相談ください。ほとんどの物が修復可能です」という相談室には「うむ」と考えこんでしまいます。

アンティークは、年代物でなおかつ鑑賞用として質が良くないと売れません。

絵付けした時代の柄や、器のデザイン、磁器の保証書、磁器が入っていた入れ物が肝要になってきます。

見れば見るほど欲しくなります。「寝ても覚めても」という心の状態です。

使いもしない高級な器を買って、家族が喜ぶ訳がないでしょう。

アンティーク物を選ぶ時は、冷静になる事ができたらひとまず成功です。

また高級磁器にボーンチャイナがあります。イギリス独自の骨灰が含まれているところから、骨灰磁器と呼ばれていました。

乳白色をしているところが特徴で、牛の骨を焼き込んだ焼き物です。

そして中国に起源をもつ磁器だとも言われています。

ただ注意する点は、ボーンチャイナは、磁器の種類のことメーカー名ではないと言うことです。

中国の白磁器との違いは「色目」です。焼成方法が異なります。

白い器は、その白さに価値があるのでしよう。

年代物となれば見分け方が難しいのです。「白さの中の白」だからです。

我が家には磁器の白物がたくさんあります。「写し物」だと分かって使っています。そして本物とはときどき出してやらないと、カビが生えてきます。

「本物」と「写し物」は共存してこそ楽しいのです。

アンティーク物は、非常に鑑定するのが難しいから、まずは疑いから入って、ひとつひとつの謎解きをしてから、古物商さんの鑑定付きで手にするのがいいと思います

陶器のコレクターには様々なタイプがあります。

広く浅くその時々で気に入ったものを買う人です。あらゆる分野にわたって「ガラクタ」も嫌わず買います。

自分の美意識のみで買ってしまおうと、まとまりのない器ばかりが、たまる事になります。また壺や酒器、茶道具といった器種を限定して買う人もいます。趣味や本業のために買わざるを得ない人達です。

本物思考の人は、器の産地に的を絞り込みます。李朝、瀬戸、伊万里がその例となります。

そんなある日、ひとりのオンナがお店にやって来ました。

年は二十代半ばくらいでしょうか。黒髪の前髪を、眉のあたりでカットした佇まいは、お人形さんのようでした。

オンナは古物商で「日本にお店を持っている」と言うのです。

買い付けに来たから「ちょっとお店の商品を見せて欲しい」なんだか怪しげな面持ちです。話を聞いてみると、どうも中国からの留学生でした。

「今日の予算は五万円」と啖呵をきりました。

それからは暫く店内を探索することになり、時間はどれくらい経ったのでしょうか。

店内に流れるジャズが心地よさを促した事には間違いないようです。閉店時間がきてしまします。

ついに店長が茶道に使う「茶碗」を出してきました。

それは流石に、いい品を抜粋してきたと思えました。

磁器でもない、「土物」の陶器でした。器としての丸みも無く、茶色の色目をした、どちらかと言うと男性っぽい「茶碗」に見えました。

鑑定書はあるのだろうか。年代物なのだろうか。

私は取引の様子を見て、とても心配になりました。

するとオンナが言いました。「価格は三万円です。取引は終了」  
「終わったのですか」という私の問いかけに幕は閉じました。

後から店長に聞いてみたところ「茶碗」は店長のお母様の形見の品だったのです。身内でもない留学生に売ってしまった心境が理解できません。

焼き物好きには「器を大切にしてくれる人が分かるのだよ」と店長に言われて「器が人を選んだのか」と言う結論に達しました。

店長の出身地は岡山県です。「茶碗」は備前焼だったと思います。

土は粘着性に富んでいるのが特徴です。「土味」と呼ばれています。ねっとりとした渋みのある色は、親近感を感じさせます。

備前焼は、茶道が発展した千利休、桃山時代に茶道具として評価されていたようです。

留学生のオンナは柔やかに器を持って手触りで器を楽しみ、いろいろな角度から眺めては口元にその「茶碗」を持っていき、お茶を飲む所作をしていました。

たくさんある器は「買い手を待っていたのだ」と思うと気持ちが落ち着きました。

私は、購買意欲という湧き上がる欲望に、いったん蓋をしてアンティークショップを出ました。

私たちの生活は焼き物の世界と似ています。なぜなら「本物」と「まがい物」が隣り合わせに暮らしているからです。服やカバンにしても、ブランド物を真似た偽ブランドが、たくさんあります。知らないで買ってしまって、後から気付いても、自分に見る目がなかったと思うしかありません。

有田焼からはじまった焼き物のロマンはこれからはじまるような気がします。